

### 狸 3 狸の穴 = = = 猪・鹿・狸より

狸の穴に注意しているものは、山の外観を一渡り見ただけで、そこに穴があるかどうかすぐに判るといふ。多く雑木山の、あまり深くない、峯から少し降った辺りが、狸の好く処だと言ふ。

貉（まみ）の穴などもそうであるが、狸の穴には、かならず沢谷の水のある処へ向けて、細い径が出来ている。朝晩定めて通うわけでもあるまいが、綺麗に叩き土のようになっていた。尻尾の箒木で撫でて通るなどとも言つた。穴には水を求める径がある一方便所がある。狸の溜糞と言ふほどで、穴から数間離れた位置に、一ヶ所に夥しく積んである。時折位置を替えるらしく、古い糞の跡が、そちこちにあることもあつた。果しているか否かは、この糞の様子からも判別したのであるが、時によって、二日や三日ぐらい留守にすることもあるといふから、糞が新しいだけでは、狸の有無はまだ、決められない。

穴は、入口から少し入った処が、最も狭いそうである。それからだんだん奥へ進むに従つて広くなって、最後に枯葉や枯草を深く敷き詰めた処がある。ここが寢床で、大きい穴になると、畳二畳敷ぐらいはめずらしくなかつた。あるいはまた穴の模様によって、寢床の奥に、さらに一段高い処が設けてあるものもある。これは湿気の多い時の用意と言ふ。雨の烈しく降つた後などは、寢床に一面水が溜まっていることもあつた。そうした時のために、必要だつたのである。

狸の穴狩りは、口元から縦にだんだん掘つていって、中から飛び出して来るところを、あらかじめ用意した木の刺股で押えるのである。しかし犬がいれば、なかへ入つて啜え出して来る。この場合には大きな犬は駄目である。しかし一つの穴に二匹も三匹もいる時は、犬も容易に啜え出すわけにはゆかぬそうである。狸の穴では、一つの穴に一匹と言ふことはめつたにない、たいてい二匹以上いる。多いのになると、六つか七つぐらゐでいた話がある。それが貉となると、より余計いるそうである。マミットオと言つて、貉は一つの穴に一〇いるものだなどとも言つた。

狸は冬至一〇日前に穴に入つて、八十八夜過ぎに穴から出ると言ふ。その期間ならまちがいなく穴にいたのである。しかし穴狩りなどするものは、入口に茅の葉などを挿しておいて、その靡（なび）きぶりで、果しているか否かを知ることでもあつた。

以前は狸の穴を見かけても、よくよく手軽にゆく場所でない限り、手を出さななだが、近頃では見つけ次第に、一日二日費やしても掘つてしまつた。岩などを利用した堅固な穴でも、ダイナマイトなどで碎いて捕つてしまふ。それでたちまち少なくなつて、近年では、一年にたつた二つしか捕らななだなど、

村の狸堀の名人が零していたものである。



自分の家の近くの藪に、昔からあると言う貉の穴があった。車も通ったほどの街道の脇で、まさかもういなかろうとすましていたが、近所のものの話では、夕方そこを通ると、時おり見ることがあると言う。狸ならよいが貉では、竹の根をわけて難儀しても合わんでなどと、狸掘りたちが言うていたから、あるいはそんなことから今もまだいるかも知れぬ。